

日本における MEGA² の編集

竹永 進

内容目次

1. はじめに
2. 歴史的経緯
 - a. MEGA 以前
 - b. MEGA の最初のコンセプト
 - c. MEGA¹ の準備の開始
 - d. MEGA¹ の諸巻の刊行、そのインパクト、プロジェクトの再編と挫折
 - e. 戦後の MEGA プロジェクトの再開、間奏曲としての MEW
 - f. MEGA² の開始とその一時的中断
 - g. MEGA² プロジェクトの継承機関としての国際マルクス・エンゲルス財団 (IMES) の設立、今日までのその機能
 - h. 新体制の下でのプロジェクトの継続とその将来展望
3. 国際的な協力の一部としての日本における MEGA² の編集作業
 - a. 日本におけるマルクスとエンゲルスの著作の受容
 - b. 日本における編集作業の始まり
 - c. 日本で準備された（ている）MEGA² の諸巻
 - d. 部門IIの第12巻でなされた特別なイノベーション、貴重な研究ツール
 - e. MEGA² の部門IV第18巻の編集作業

参考文献

1. はじめに

マルクスの経済思想に対する関心は、1990年代始めの現存社会主義体制の崩壊と冷戦体制の消滅の後、急速に後退した。だが、「歴史の終焉」というキャッチフレーズに象徴される資本主義の将来についての楽観的ないしバラ色の展望が一時期は支配的であったにもかかわらず、過去20年間に観察された今日の世界のさまざまな出来事、とりわけ、昨今の深刻な世界金融危機は、資本主義についてのこのような見方を変化させこれに疑問を投げかけ、マルクスとマルクス思想に対する関心を復活させていくように思われる。しかし、状況のこうした短期的な変遷とは別に、マルクスとエンゲルスの全著作を網羅する MEGA² (Marx Engels Gesamtausgabe) の編集作業

は、1970年代の中葉以来、1980年代末から1990年代初にかけての一時的な中断をはさんで続けられている。

本稿の趣旨は、1920年代から今日にいたるMEGAプロジェクトの歴史的経過の概略とその編集作業の現在（2009年12月）の進捗状況を示し、その上で、1990年代中葉以来日本で行われ現在も進められている編集作業、とりわけ、ヨーロッパから地理的・文化的・言語的に遠く隔たった日本の研究者におそらく特有と思われる編集作業上の諸問題と諸困難について、筆者の個人的な経験をもとに具体的に紹介することである。

2. 歴史的経緯

a. MEGA 以前

マルクスが1883年の彼の死後未刊のままに残した草稿の編集作業を引き受けた最初の人物は、言うまでもなくエンゲルスであった。彼は、マルクス死後の彼に残された生涯の時間とエネルギーの多くを、『資本論』第二部と第三部の草稿の編集と刊行にささげた。しかし、マルクスの残した草稿は『資本論』のこれら二つの部に相当するよりもはるかに多くの資料を含むものであった。エンゲルスの死後、これらの資料（全部ではないが）はマルクスの親族と遺族により、ドイツ社会民主党（SPD）の党文庫に寄贈された。SPDは、カール・カウツキーを理論的領袖とする当時の世界の主導的な社会主义政党として、第二インターナショナルの内部で中心的な役割を演じていた。エンゲルス没後に、マルクス（およびエンゲルス）の文献的遺産としてこれらの草稿を保管し、刊行可能なものについてはその刊行の責任を引き受けたのはカウツキーであった。この部面での彼の仕事のうちもっとも重要なものは、マルクスのプランによれば『資本論』第四部をなすことになっていた『剩余価値学説史』の刊行（1905－1910年）であった。カウツキーは、マルクスのこの著作に加えて、党の理論誌であった*Die Neue Zeit*誌上にいくつもマルクスの断片的著作物を初めて公表した。そのうち最も重要でよく知られているのが、マルクスの「経済学批判体系」の最初の下書きである『経済学批判要綱（グランドリッセ）』への「序説（Einleitung）』である。エンゲルスもカウツキーも、マルクスの最重要的経済学的著作物のいくつかを広く利用可能にする上で重要な役割を演じたことは確かである。しかし、彼らの努力にもかかわらず、マルクス（とエンゲルス）の文献的遺産の多くは未刊のままにとどまり、ごく少数の専門家にしかアクセスしないままの状態であった。また彼らは、どの程度の完全さのものであれ、マルクス（およびエンゲルス）の著作集を作るというプランを一度も抱懐したことはないかったように思われる。

b. MEGA の最初のコンセプト

デヴィッド・リヤザノフは第一級のロシアのマルクス文献学者であり、1917年のロシア革命以前からマルクス学者として活動しており、ドイツ社会民主党の理論的指導者たちとも緊密な関係にあった。彼はドイツの党文庫に保管されていたマルクスとエンゲルスの草稿に自由にアクセスすることができた。彼は、1921年にモスクワに設立されたマルクス・エンゲルス研究所の所

長に任命された。この研究所の仕事は、さまざまな時期にさまざまな言語で刊行されたマルクスとエンゲルスの著作を集め、彼らの未刊の著作物（草稿、書簡、彼らが読んで下線や欄外書き込みを入れている書籍、等々）を収集すること、またこれとならんで、その当時の国外でのマルクスとエンゲルスについての研究活動（書籍、雑誌論文）をサーベイすることであった。中でも、ロシアの外部での当時の世界のマルクス主義にとってもっとも重要な地域であったドイツとオーストリアの研究のサーベイは特に重視された。『マルクス価値論概説』（初版 1923 年）の著者であるルービンはこの研究所の主要メンバーの一人であった。彼はリヤザノフとの密接な協力関係の下に研究所のこうした任務に携わった。そして、彼の『概説』はこの研究所における以上のような研究活動の一つの結果であったと見なすことができる。

1921 年にレーニンがリヤザノフ宛てた手紙（既存の『レーニン全集』には収録されていない）の中でマルクスとエンゲルスの全集のプロジェクトを提案し、この提案がその後の MEGA¹（1970 年代に開始され現在も進行中の MEGA² プロジェクトと区別するために、1920 年代に始まり第二次世界大戦中に中断された MEGA のプロジェクトは MEGA¹ と表記する）の出発点を画した、と言われる。

c. MEGA¹ の準備の開始

このような完全な著作集を準備するために最初になすべきことは、オリジナル文献と二次資料（前者の中で引用ないし言及されている著書・定期刊行物・新聞・公的報告書）を収集することである。このような任務を遂行するために、研究所は、ドイツ社会民主党文庫に保存されていた草稿とノートに貼り付けられた切り抜きから膨大な量のフォトコピーを取った。研究所は長期にわたる努力の結果、マルクスとエンゲルスの草稿の約三分の一を種々のルートから集めることができた。しかし、オリジナル草稿のうちの残りの三分の二についてはフォトコピーを入手しえたにとどまった。この三分の二の部分はアムステルダムの社会史国際研究所（IISG）が買い上げていた。今日でもなお、マルクスとエンゲルスの草稿のほぼ全体が二つの機関（「マルクス・エンゲルス研究所」は 1931 年以来数次にわたって改組・改称され、現在では「国立ロシア社会・政治史アーカイブ」となっている）に同じ分割比率で所有されている。

全集準備の第二段階は草稿ないしそのフォトコピーの解読である。周知のように、エンゲルスとは対照的に、マルクスの筆跡はその悪筆ゆえに解読がきわめて困難であった。しかもこの悪筆は彼の生涯を通じて一定しているのではなく時と共に変化している。マルクスの草稿の解読にあたる者はドイツ語ネイティブかそれに匹敵するドイツ語の熟達者でなければならず、でなければ、このいずれかからの十分な補助を受けることができなければならない。その上に草稿解読の仕事を行なえるに足る訓練が必要である。このような条件を満たすことは容易ではないが、しかし、マルクス・エンゲルス研究所がロシア人スタッフとならんで一定数のドイツ語ネイティブ・スタッフをリクルートしたであろうことは容易に想像できる。ロシアとりわけモスクワには、第一次世界大戦後の 1920 年代にドイツ、オーストリアを含む他の諸国からの外国人政治亡命者たちが居住していたからである。1920 年代に蓄積された大量の解読・タイプ原稿はドイツ語圏諸国の

出身者の協力を得て作成されたと考えることができるであろう。しかし 1941 年までに刊行された MEGA¹ の諸巻に実際に利用されたのはこれらの解説原稿のうちの一部にすぎない。この年には『経済学批判要綱（グルンドリッセ）』の第二部が出ている。それは正確には MEGA¹ の一巻としてではなかったが、しかし MEGA¹ の準備作業の結果として刊行されたことは明らかであり、その編集基準も MEGA¹ のそれまでの諸巻に準拠している。『グルンドリッセ』の刊行をもって MEGA¹ のプロジェクトは事実上終わった。そして、残りの解説・タイプ原稿は後代に改めて利用されるべく未使用のままに保管されることになった。事実、これらは現在、非ドイツ語ネイティブによる編集作業にとって不可欠の前提をなす資料として使用されている。もちろん、これらの解説・タイプ原稿は完全に信頼のおけるものと見なしうるものではなく、マルクスのオリジナル原稿との対照によるチェックが必要である。にもかかわらず、これらが、マルクスのやつかい極まりない原稿を読む煩労を著しく省いてくれる有力な手段であることには変わりはない。

d. MEGA¹ の諸巻の刊行、そのインパクト、プロジェクトの再編と挫折

MEGA¹ は、リヤザノフが 1920 年代にその準備過程で収集した資料と当時得られていた文献学的知識に基づいて作成したプランに従って、42巻からなり、三つの部門（部門 I :『資本論』に関係するものを除くマルクスとエンゲルスの著書・論文および草稿、部門 II :『資本論』の各版とマルクスとエンゲルスの関連草稿・著作物、部門 III :マルクスとエンゲルスの間で交わされた書簡）から構成されることになっていた。MEGA¹ のうち最初に刊行されたのは、1844年初頭までに書かれたマルクスの種々の著作物を含む部門 I の第一巻であり、フランクフルト・アム・マインで 1927 年に出た。1929 年から 1932 年までにベルリンで 10巻が刊行され、また、1935 年にソビエト社会主義共和国連邦外国人労働者出版協会というところから 2巻が出ている。従って、計画されていた 42巻のうちの合計 13巻が 1920 年代中葉からの約 10 年の間に出版されたことになる。これらの既刊巻のうちには、『資本論』とマルクスの関連諸著作および草稿を含む巻、すなわち、MEGA¹ の部門 II に属する巻はまったくなかった。

この期間中に研究所の組織に重大な再編があった。1931 年、リヤザノフは逮捕され所長の地位を追われた。またルービンを含む研究所の若干の研究スタッフも追放となつた。同じ年にアドラツキーが新しい所長に任命され、マルクス・エンゲルス研究所はマルクス・エンゲルス・レーニン研究所となつた。MEGA¹ のプロジェクトはアドラツキーの指導の下で継続されたとはいえ、その編集方針にはいくつかの変化が見られた。リヤザノフがマルクスの著作類とエンゲルスのそれとを同じ時期のものであつても部門 I の別々の巻として刊行したのに対して、1931 年以降は両者の著作物が单一の巻にひとまとめにして出されることがあつた。リヤザノフが原草稿を可能な限り忠実に印刷ページの上に再現しようとしたのに対して、アドラツキーによって刊行された諸巻には原草稿に加えられた恣意的な操作や歪曲の痕跡が存在する。このようなやり方のよく知られた例が、MEGA¹ の部門 I の第 5巻として 1933 年に刊行された『ドイツ・イデオロギー』である。マルクスとエンゲルスの草稿の編集上の諸問題にもかかわらず、『ドイツ・イデオロギー』の刊行は、その当時またそれ以後のマルクスの思想についての議論に大きなインパクトを与えた。

『ドイツ・イデオロギー』とならんで、マルクスの『経済学・哲学手稿』もまた、MEGA¹ の部門 I の第三巻として 1932 年に初めて公刊された。この著作もまた『ドイツ・イデオロギー』におとらず、マルクスの思想とその解釈をめぐる論争に長期にわたるインパクトと影響を与えた。

1930 年代中葉以降、第二次世界大戦が差し迫る状況の中で、スターリンの政策遂行には役立たないあるいは有害でさえあると判断されたマルクスとエンゲルスのオリジナル資料の研究者たちは抑圧の対象となり、MEGA¹ プロジェクトは 1935 年に出た最後の 2 巻をもって中断をよぎなくされた。しかし積み上げられた未完成の大量の資料が残された。これらの準備資料のうち、1857 年から 1858 年にかけて執筆され『資本論』と直接に関係しているマルクスの最初の経済学草稿は、MEGA¹ の諸巻に比肩しうる基準によって編集されたとはいえ、すでに公式には存在していなかった MEGA¹ の諸巻としてではなく、1939 年と 1941 年に独立の刊行物として 2 巻に分けてモスクワで出版された。これらの草稿は『経済学批判要綱（グレンドリッセ）』と題されたが、それはおそらく、リヤザノフが作成した当初のプランでは MEGA¹ の部門 II の最初の巻となるはずのものであったのであろう。『グレンドリッセ』を当時の状況の中で出版することは、MEGA¹ プロジェクトの一環としてあらかじめ遂行されていた準備作業なくしては不可能であつたであろう。『グレンドリッセ』は第二次大戦後の 1953 年に、リプリント版として当時の東ベルリンのディーツ出版社から一巻本として出版された。そしてこの戦後のリプリント版によって『グレンドリッセ』は世界中のマルクス（主義）経済学者に知られることになった。しかし、この草稿がマルクスの思想についての議論に広くインパクトを及ぼすことになるのは、それからさらに約 15 年の歳月を隔てた 1960 年代末からのことであった。

e. 戦後の MEGA プロジェクトの再開、間奏曲としての MEW

第二次世界大戦後、新たに改組されたモスクワのマルクス＝レーニン主義研究所と旧東ベルリンに新しく設立されたマルクス＝レーニン主義研究所が、中断されていた戦前の MEGA プロジェクトを共同で担うことになるはずであった。しかし、ベルリンの研究所は実質的にまったく原資料を保有していないなかつたし、また、モスクワの研究所は新しい拡充されたレーニンの著作集（レーニン全集）の刊行を優先任務としていた。両研究所はそれぞれの国の支配政党の中央委員会の直接的なコントロール下に置かれていた。ドイツの社会主義統一党の方はマルクスとエンゲルスの新しい著作集の刊行を推し進めようとしたが、ソ連の共産党はマルクスやエンゲルスの著作よりもレーニンの著作により重きを置いた。とりわけ後者は、レーニンのものよりも規模が大きくなりそうなドイツの思想家たちの著作集のいかなるプロジェクトにも抵抗した。レーニンの著作集の第四版にはおよそ 40 巻が含まれることになっていたので、マルクスとエンゲルスの新しい著作集はこのレーニンの著作集を大きく超えない規模に設定されなければならなかつた。このような状況の下では、マルクスとエンゲルスの著作の全集を企画することは問題外であったので、旧東ベルリンのマルクス＝レーニン主義研究所はプロジェクトの規模縮小を受け入れざるを得なかつた。膨大な量の両者の草稿の編集途上の資料とフォトコピーとを保有していたソ連の研究所の助けを得て、MEGA ではなく MEW (Marx Engels Werke, Volksausgabe) と称されたマル

クスとエンゲルスの新しい著作集が、主として旧東独の研究所によって準備されることになった。MEW の刊行は 1956 年に開始され 1968 年まで続き、全体でちょうど 41 卷となった。マルクスとエンゲルスが書いた多くのもの（とりわけ、『ドイツ・イデオロギー』や『経済学・哲学草稿』などのような、初期の草稿類）が欠けていたにもかかわらず、これは当時としては他に並ぶもののない彼らの著作集であったのであり、他の諸言語への翻訳の底本として役立てられた。例えば、MEW の全 41 卷の日本語訳は 1959 年から 1975 年にかけて行われた。すなわち、ほんの数年のラグを伴つただけで元のドイツ語版（マルクスとエンゲルスの著作物にはドイツ語以外の諸言語によるものも多く含まれるが、MEW ではすべてドイツ語に訳して収録されている）の刊行の進行とほとんど並行的に翻訳されたのである。これは、旧ソ連を除くと世界でも他に例のない現象と言えるであろう。そして、急速な経済成長、東西対立、そして、政治的激動のこの時代に、MEW の原版とその翻訳は広く流布し、マルクスに関心を持つ研究者や学生そして労働組合活動家たちのために大きな役割を演じた。

にもかかわらず、マルクスとエンゲルスの文献的遺産の多くが MEW では未刊行のままになつたのであり、彼らの理論と思想の真に科学的な研究のためには、編集作業に利用しうる限りの彼らの著作物と関係資料の全体が公刊されることが望まれた。1960 年代の末、ちょうど MEW が完了したのと同時期に、戦前の MEGA¹ プロジェクトの再開に向けた動きが旧東独と旧ソ連の両研究所内外の研究者の間で復活した。MEGA² は当然にも MEGA¹ を受け継ぐはずのものであったが、しかし彼らは MEGA¹ の諸欠陥をよく知っており、その編集方針を全体として受け入れることはできなかつた。新たな編集方針を決定するに先立つて、当時の他の批判的・歴史的全集とりわけドイツ文学関係の全集の包括的な評価と、これらの全集版の編集者たちとの活発な意見交換とが行われた。その結果次のような全体計画についての合意が得られた。すなわち、1. すべての文献的遺産を含めることとし、含められるべきテクストのいかなる恣意的な取捨選択も排除すること、2. 各テクストを厳密に年代順に配列してその成立のあらゆる段階を再現すること、3. すべてのテクストを書かれた当時の正書法と句読法を用いてオリジナル原語で再現すること、4. マルクスとエンゲルスの書簡だけでなく第三者から彼らに宛てられた書簡も含めること、5. 注釈を用いてテクストを包括的に説明すること、6. 四部門構成とし、部門 I は『資本論』と関連著作を除くマルクスとエンゲルスのすべての著作物を、部門 II は『資本論』の各版と関連著作のすべてを、部門 III は書簡を、部門 IV は抜粋帳、年表、文献リスト、マルクスとエンゲルスの覚え書きを、それぞれ含むこと。

MEGA² の諸巻の準備と刊行の責任を有する主要な機関は上記の二つのマルクス＝レーニン主義研究所であったが、これらはそれぞれの国の権力政党の中央委員会の直接的な支配下に置かれていた。そして MEGA² プロジェクトは一種の国家プロジェクトとして位置づけられた。豊富な予算が長年にわたつてこのプロジェクトに割り当てられた。また多数の特別要員がこのプロジェクトに携わるべく配置され、彼らには特権的な環境の下での訓練の機会が与えられた（例えば、ロシアの要員のうちのあるものたちは、ドイツ語圏の国に一定期間滞在しなくとも、特殊な施設においてほとんどネイティブスピーカーと同等のレベルでドイツ語をマスターすることができ

た)。

だがこのことはまた、MEGA² プロジェクトが共産党の中央機関の直接かつ緊密な監視の下で進められたということでもあり、編集作業は党の政治的・イデオロギー的方向性により強く影響された。同種の現象はすでに、アドラツキーの指導の下に 1931 年以後編集・刊行された MEGA¹ の諸巻にも見られた。しかし、レーニンやスターリンの著作集の経験を経た後の MEGA² については、政治的・イデオロギー的影響は戦前に比べてはるかに組織的で広範囲で持続的なものであった。MEGA² の科学的性格を毀損しかねず、また MEGA² を党の大義に仕えるためのイデオロギー的道具とすることにもなりかねない、このようなバイアスがもつとも顕著に露見するのは、各巻のテクスト部の冒頭に置かれる序文（序文はマルクスとエンゲルスの著作のレーニンの著作との関連を示すことが求められ、マルクス＝レーニン主義研究所の所長により認可されなければならなかった、等々）、また、資料の部に含まれる編集者注および人名目録においてである。これらは、読者がマルクスとエンゲルスのテクストを読み解釈するにあたって、事前に特定の枠組みを与えるような性質のものである。

f. MEGA² の開始とその一時的中断

1972 年に上記の合意に従った MEGA² の試作巻 (Probefband) が刊行された。それは『ドイツ・イデオロギー』の新たに編集されたテクストを含む部門 I の中の 1 巻であった。この巻の刊行は、MEGA² の新しい編集作業の暫定的成果と、試行版とはいえ新しい MEGA² の実際の刊本を具体的に示すことを趣旨とするものであった。この巻はそれ自体価値あるものであり、当時のマルクスとエンゲルスの当該草稿の研究者たちに一定のインパクトを与えた。しかしこの巻はまた、多くの専門家（研究者、編集者、製本関係者、等々）からの意見を求めるることも目的とするものであった。そして、この試行版についての関係者から寄せられた意見を考慮に入れて、公式の編集方針が決定され公表された (*Editionsrichtlinie der Marx-Engels-Gesamtausgabe*, mimeo, Berlin, 1976)。こうして MEGA² はスタートしたのである。

当初計画されていた MEGA² の巻数は全体で 164 巻すなわち MEGA¹ の巻数のおよそ 4 倍の大きさであった。また、当初の計画によればこれらすべての巻は世紀転換期を大きく超えない期間のうちに、すなわち 25 年を大きく上まわらない間に、刊行されることとされていた。この目標を達成するためには、毎年平均して少なくとも 5 つの巻が刊行されなければならなかつた。最初の二つの巻（部門 I と部門 III の第一巻）は 1975 年に出た。またその後は（1984 年の 4 巻と 1985 年の 5 巻を除いて）1992 年まで 2 巻ないし 3 巻が新たに発行され続け、18 年の間に合計 47 巻が出た（1991 年と 1992 年に出た 5 つの巻はすでに 1990 年以前に編集作業が行なわれていたものである）。これは、プロジェクトの全体を完了するには 55 年以上を必要とするペースである。すなわち、この 18 年間に旧東ベルリンとモスクワで行なわれていた編集作業は初發に期待されていたパフォーマンスのおよそ半分しか達成することができなかつた、ということである。この大幅な刊行の遅れは、1970－80 年代におけるさまざまな部面（経済、社会、政治、等々）で進行しつつあった旧社会主義諸国における麻痺状態と無関係ではないであろう。

1980 年代から 1990 年代への変わり目に旧ドイツ民主共和国と旧ソ連の両国の国家と支配政党がいずれも崩壊したのにともなって、旧東ベルリンとモスクワの二つのマルクス＝レーニン主義研究所は解体された。従って MEGA² の二つの主要な編集センターがなくなった。このことは、後続諸巻の準備作業が一時停止とならざるを得ないことを意味した。こうして MEGA² プロジェクトの継続そのものが危機に陥った。

g. MEGA² プロジェクトの継承機関としての国際マルクス・エンゲルス財団 (IMES) の設立、今日までのその機能

1990 年 5 月、1936 年にドイツ社会民主党の党文庫からマルクスとエンゲルスの草稿のおよそ三分の一を買い取りそれ以来保管しているアムステルダムの社会史国際研究所 (IISG, Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis) の呼びかけにより、4 つの機関 (IISG、トリーアのカール・マルクス・ハウス、モスクワのマルクス＝レーニン主義研究所、および、旧東独の科学アカデミー) の代表者が IISG において、MEGA² プロジェクトを継続するための新しい組織である国際マルクス・エンゲルス財団 (IMES, Internationale Marx Engels Stiftung) を設立する目的で会合をもった。これら 4 つの機関のうち、ドイツの科学アカデミーは現在ではベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー (BBAW) として再編されており、また、モスクワのマルクス＝レーニン主義研究所は国立ロシア社会・政治史アーカイブ (RGASPI) となっている。この会合の議事録によれば次の諸点について合意が得られた。1. 拡大した国際的な規模での MEGA² の刊行の継続、2. 4 機関による IMES の創設、3. IMES の本部はアムステルダムに置くこと、4. IMES は営利目的の機関ではなく、またその活動は政治的に中立でなければならない、5. IISG とモスクワの国立アーカイブは編集作業のために必要な保管草稿を利用に供すること、6. IMES が MEGA² の後続諸巻の刊行主体として明記されること、等々。

1990 年 10 月、IMES は、MEGA² の準備作業を引き受け再開する任務を帯びて、オランダの法律に基づいて財団 (Stiftung, foundation) として正式に発足した。そして、1991 年、国際的な協力を促す目的で、イスラエル、デンマーク、アメリカ合衆国、ドイツ、フランス、イタリア、ポーランド、コロンビア、イギリス、オーストリア、ロシア、イス、日本、スペイン、ベルギー、ハンガリーを含むいくつかの国（19世紀の経済・政治・法制史、経済学、哲学、政治学、等々）さまざまな分野の著名な学者をメンバーとする国際学術諮問委員会が組織された（日本からの当初のメンバーは、大内力、杉原四郎、杉本俊朗、服部文男であったが、現在交替を検討中）。こうして、広く国際的な協力に基づいて政治的・イデオロギー的な制約なしにプロジェクトを執行することが可能になった。しかしそれと同時に、権力の座にある政党との密接な関係の解消とともに、党との関係ゆえに旧体制の下で MEGA² が享受することのできていた編集・出版の企画としては前例のないほどの潤沢な財政的基盤もまた失われることになった。IMES はその事業継続のための深刻な財政問題に直面しなければならなかった。

この点で特に重要なのはドイツ学術審議会の決定であった。この決定は、ドイツ科学アカデミーに対して、現代の文献学的基準に則って編集される MEGA² プロジェクトをその長期プログ

ラムに採用するように勧告した。MEGA²を採用するかどうかのアカデミーによる最終決定は、既刊の諸巻の検討結果次第であった。この検討を目的として特別に組織された国際委員会は肯定的な判定を下した。そしてその後、1992年初頭に、IMESとドイツ学術審議会の間で、後者はMEGA²のうち十分に準備作業が進んでいたいくつかの巻を完成させる責任を負うという協力合意が締結された。この合意の期限は2年間に限られていたが、しかしこの合意は、アカデミーのプランとしてのMEGA²の責任が、当時はまだ明確な形を整えていなかった新しいベルリンのアカデミーによって引き継がれることを想定していた。

こうしてIMESは、根本的に変化した条件の下で、また、異なった形態において、20年以上も前にスタートしたプロジェクトを継続遂行することになった。IMESが出版を企図したのは、「マルクス＝レーニン主義の古典的大家たち」の著作ではなく19世紀の二人の傑出したドイツの思想家の著作であった。IMESは独自の資金源をもたず、従って編集作業の資金調達のために、科学研究を奨励する他の諸機関に依存せざるをえない。MEGA²は、限られた財源からの資金援助の獲得を目指す競争関係にある多数のプロジェクトのうちのひとつとして、その成果の質と量や成果を出すために必要な時間等々に関する一般的な基準を満たさなければならなかつた。原テクストの再現と注釈にかんするかぎりでの質は肯定的に評価されたけれども、各巻の刊行までに必要とされた時間は極度に長いと見なされその短縮が求められた。また加えて、ドイツ学術審議会はIMESに対してプロジェクト全体の規模を縮小することを要求した。IMESは、それぞれの巻の準備に必要とされる期間をどの程度短縮することができ、プロジェクトの全体としての大きさをどの程度まで切り詰められるかを検討しなければならなかつた。

この切り詰めを実行するために、マルクスとエンゲルスが読んだ書籍のページへの欄外注記を当該書籍の本文部分とともに含むことになっていたおよそ30の巻は、MEGA²プロジェクトから除外された。そして、これらの巻に代わるただひとつの巻として、MEGA²の部門IVの末に置かれた第32巻が1999年という早い時期に刊行された。この巻には、マルクスとエンゲルスの個人蔵書のカタログが含まれ、これに、それぞれの書籍を彼らがどのように読んだかを示唆する書籍上に残された痕跡についての簡単な記述が付されている (*Die Bibliotheken von Karl Marx und Friedrich Engels. Annotiertes Verzeichnis des ermittelten Bestandes. Vorauspublikation*)。しかし、マルクスとエンゲルスという二人の思想家の著作をひとつの著作集としてまとめて出すという当初の方針は維持された。彼らをあらゆる事柄について原則として同じ意見を分有する单一の思想家とみなすことに対する見方は以前から存在していた。これらの見方に賛成するかどうかは別として、この二人が彼らの知的生活のほとんどの部分にわたって親密な協力関係にあったことは否定しようもなく、一方の著作集が他方のそれと分離されたならば、両方に含めなければならない著作が多数存在することになるであろう。両者の著作の恣意的な取捨選択によって作られたマルクスとエンゲルスの著作集の以前のいくつかの例においては、彼らの著作物のあるものがイデオロギー的ないし政治的理由により掲載されていない。可能な限り完璧な著作集を目指すというMEGA²のコンセプトは、このような非難を回避することに寄与するものであった。上に見たMEGA²の全体の規模の切り詰めはこのコンセプトを妨げることな

く最小限度内で行なわれた。この切り詰めの結果、MEGA² の規模は 1970 年代始めの当初プランの約 160 卷から（それぞれの分冊を別々の巻と数えて）122 卷に縮小された。

IMES は、これら諸巻の残りの部分の準備作業を開始するに先立って、Probefband の検討結果を経て決定され 1976 年に公表された編集方針を見直し、新しい歴史的条件の中で作り替えるべきならなかった。もっとも重要な点は、MEGA² の脱イデオロギー化とあらゆる国家権力ないし政治政党からの独立であった。このために、各巻のテキスト部分の冒頭に置かれていた序文は放棄されなければならなかつた。また、旧編集方針の中のその他多くの細かな点も改変された。新しい編集方針は 1992 年 7 月に採択され翌年公表された (*Editionsrichtlinie der Marx-Engels-Gesamtausgabe*, Dietz Verlag, Berlin, 1993)。それと同時に MEGA² は Dietz Verlag から Akademie Verlag へ版元を変更した。この変更は、従来の政治的およびイデオロギー的な関係の一切からの最終的な断絶を象徴するものであった。それゆえ、マルクスとエンゲルスの著作の刊行は MEGA² という同一の呼び名で継続されることになったとはいえ、このような状況での再開はこの全集に断層が入っていることを示すものであり、MEGA² は、新体制の下でそのプロジェクトが完結するかまたは少なくとも一定の点まで進捗したときには、性格を異にする二つの部分からなっていることになるであろう。それは、21 世紀あるいはさらに先の時代にまで 20 世紀の世界史の痕跡を伝える、19 世紀の二人のドイツ人思想家の類まれな著作集となるであろう。

h. 新体制の下でのプロジェクトの継続とその将来展望

122 卷のうち旧体制下で 47 卷が 1992 年までに刊行されていた。従ってまだ残っているのは 75 卷であった。これらは新規に定められた編集方針に従って刊行されることとなつた。しかし、この 75 卷のうちの最初の巻が出たのはやつと 1998 年になってのことであった。1993 年から 1997 年までの 5 年という時間幅は具体的な最終成果の出ない長い懷妊期間であった。そして、1998 年から 2009 年までの 12 年間に、合わせて 16 卷が刊行された。平均的な刊行ペースは年間 1 卷から 2 卷であった、つまり、1992 年までと比べて約半分の刊行ペースへのスローダウンであった。しかし、現在ベルリンとモスクワで仕事をしているフルタイム編集者が少人数であることと割り当て予算の不十分さを考えると、12 年間で 16 卷という刊行実績はそれほど悪くはないであろう。この 16 卷のうち、8 卷はドイツのグループにより、5 卷はロシアのチームにより、そして、3 卷は日本のチームにより準備されたものである。ドイツとロシアのチームとは異なつて日本のチームにはフルタイムの編集者はまったくおらず、ただ若干数の研究者たちが本職である教育・研究活動のかたわら編集作業にボランティアとして加わっているだけである。また現在、44 卷が準備過程にあり、そのうち 18 卷がベルリンで、2 卷がブレーメンで、1 卷がブラウンシュワイクで、1 卷がマールブルクとヴェニスで、12 卷がモスクワで、3 卷が東京で、1 卷が仙台で、3 卷がフランスで、1 卷がアメリカで、1 卷がアムステルダムで、そして、1 卷がコペンハーゲンで、それぞれ進められている。しかし、各巻についての準備の進捗状況ははつきりしていない。残りの 15 卷についてはまったく準備がなされておらず、それぞれの編集作業を

だれがどこのチームで受け持つのかさえまだ決まっていない状態である。2009年までの過去12年間の刊行ペースから推し量ると、残りの59巻を完成させるにはなお40年以上が必要であろう。編集要員の雇用と資金調達の面でMEGA²プロジェクトがもっとも大きく依存している機関であるベルリン・ブランデンブルク・科学アカデミーは、MEGA²に対する支援を更新するかどうかを決定するために、2015年にプロジェクトの全体の進捗状況について検査と評定を行なう予定である。この評定の結果が実質上、プロジェクトが存続しうるかそれとも理由は異なるとはいえる先行のMEGA¹のケースのように中断されるか、を決定するであろう。

1930年代中葉までにMEGA¹において実際に刊行された諸巻の中には、『資本論』とその関連草稿に関する部門IIに属するものは1巻もなかった。もっとも、これらのうちのいくつかはマルクス・エンゲルス研究所（ないしマルクス・エンゲルス・レーニン研究所）でなされた研究の暫定的成果として研究所の雑誌 *Архив Маркса и Энгельса* にロシア語訳の形で刊行されていた。こうした形態での公表資料のうちもっともよく知られているのが、1864年に執筆されたと推測される『資本論』第一部の最初の草稿の最終章であった「直接的生産過程の諸結果」である。だがMEGA¹とは対照的に、MEGA²では初発から現在に至るまで同じ部門IIが優先されているように思われる。他の三つの部門とは大きく異なって、部門IIについては一つの巻（正確には一つの巻の中の一部）すなわちこの部門の第四巻の第三部（1863年から1867年に執筆された経済学草稿の一部）のみが未刊である。この巻（の最後の部）の刊行は今年中ないし遅くとも来年中に見込まれている。つまり、エンゲルスの没年の1895年以前に出版された『資本論』の全刊本と『資本論』に関連するすべての既知の草稿が、まもなくオリジナル言語で一般に利用可能になる、ということである。部門IIはもちろんMEGA²の一部であるとはいえ、その完了はプロジェクトの一つの独立した達成とみなすことができ、『資本論』とマルクス経済学一般についての将来の研究に測り知れない貢献をなすであろう。1998年以後に刊行された部門IIに属する5つの巻のうち3巻が日本の研究者によって準備されたということを特に強調しておきたい（他の2巻はドイツで編集）。これは、マルクスとエンゲルスのオリジナル・テクストの刊行の歴史における前例のない現象であり、旧体制の崩壊後に立ち上げられた国際的な協力の成果である。

部門IIの次に進んでいるのは当然、『資本論』関係のものを除いてマルクスとエンゲルスの生存中に刊行されたすべての著書・論文および未刊の草稿を含む部門Iである。この部門の32巻のうち、半数をやや上まわる18巻はすでに刊行されており、残りの14巻がなお未刊である。そのうち9巻が現在準備中であり、そのうちの7巻は今後数年のうちに刊行されるものと見込まれている（1844年8月から1848年2月までの間に執筆されたマルクスとエンゲルスの著書・論文・草稿を含む第4・5・6巻。そのうちもっとも注目されるのは1845年の『ドイツ・イデオロギー』を収録することとなる第5巻。1857年から1858年までの経済恐慌の間の「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」紙へのマルクスの寄稿記事を主体とする第16巻、『資本論』第一部初版刊行直後の1867年9月から1871年3月までの数年に関連する第21巻、そして、マルクスの没年から1895年8月までの生涯最後の時期のエンゲルスの著作を含む第30・32巻。このあいだの第31巻はすでに2002年に刊行されている。これら2巻はエンゲルス生誕の

1820 年から 190 周年を記念すべく 2010 年に刊行が予定されている。)。

部門 II を別とすれば、刊行の遅れの主な原因は部門 III と部門 IV にある。しかしこれらの部門においても、今後数年のうちに、部門 III については 4 卷（1862 年 1 月から 1869 年 2 月までの期間の書簡を収録する第 12・14・15 卷、あいだの第 13 卷はすでに 2002 年に刊行済み。そして 1889 年 10 月から 1890 年 11 月までの期間をカバーする第 30 卷）が、部門 IV については 2 卷（1857 年から 1858 年の恐慌にかんするマルクスのノートを含む第 14 卷と、1864 年から 1868 年までの主として『資本論』第三部の諸テーマに関連する抜粋ノートを収録する日本で準備中の第 18 卷）が、それぞれ刊行予定である。

このように、全四部門合わせて 14 の巻が、1998 年から現在までに刊行された 14 の巻に続いて、今後数年のうちに刊行予定である。

以上に見たところから、2015 年以降の MEGA² プロジェクトの生き残りは、部門 III と部門 IV の作業の進展に大きく依存しているということができるであろう。マルクスとエンゲルス相互間および第三者からの彼ら宛てのこれまでに知られている書簡のすべてを収める部門 III については、計画されている 35 卷のうち 12 卷がすでに刊行されており、4 卷がまもなく刊行予定であり 2 卷がなお準備中であるが、残りの 17 卷のための資料にはいまだ手が付けられていない状態である。マルクスとエンゲルスの欄外書き込みやコメントの入った既知の抜粋ノートと切り抜き帳をすべて収録する最後の部門 IV については、計画されている 32 卷のうちすでに刊行されているのは 11 卷であり、2 卷がまもなく刊行予定であり 14 卷（マルクスの数学ノートについての第 30 卷を含む）がなお準備中であるが、残りの 5 卷のための資料にはいまだ手が付けられていない状態である。手つかずのままになっている巻の数から判断して、また、現在準備中の諸巻のための編集作業の進捗状態は考慮しないとすれば、部門 III の遅れがもっとも深刻である。

準備作業の進捗が常に予定よりも遅くなる傾向があることは確かであるが、しかし、MEGA² の現状についての上に示したデータはプロジェクトの将来について多少の楽観的な展望を与えるものであるように思われる。またこの展望は、MEGA² の各巻がマルクスとエンゲルスの著作に関心を持つ世界の研究者たちにどのように受けとられているかあるいは今後受けとられるか、MEGA² がこれらの人々の期待にどのように応えているか、にもかかっている。

2015 年に BBAW が MEGA² プロジェクトの更新を承認するかどうかの予測にあたって、以上のようなこれまでと今後数年間の編集作業の進捗状況とは別にもうひとつの懸念材料がある。それは、上に見たように部門 II が残る第四巻の第三部分の今年ないし来年の刊行をもって完結することである。これから 2015 年までの刊行が上記の範囲でいかに順調に進んだとしても、全四部門を最後まで仕上げるにはさらに 10 年か 20 年あるいはそれ以上の時間がかかるることは確実である。しかも、中断と混乱の期間を間に挟んでいるとはいえ、MEGA² の事業は開始からすでに 40 年以上の時間を費やしていることになる。こういう状況を考えると、マルクスの主著『資本論』にかかる部門 II の完結をもって MEGA² そのものを 2015 年で終結させる方向に、BBAW の判断が傾くことも予想されうるであろう。

3. 國際的な協力の一部としての日本における MEGA² の編集作業

a. 日本におけるマルクスとエンゲルスの著作の受容

本節の主題に入る前に、MEGA² の編集作業の一部が今日、地理的・文化的・言語的にヨーロッパから遠く隔たつ日本で組織されたチームの責任に帰することになった歴史的経緯を手短に振り返っておきたい。日本には、マルクスとエンゲルスおよびその他のマルクス主義著述家の著作のおよそ一世紀にわたる導入・翻訳・研究の伝統が存在する。彼らの理論と思想を受容するための努力は大学の研究者によっても社会運動・労働運動関係者によっても行なわれた。第二次世界大戦前の時代から、マルクス主義の思潮は日本のアカデミックな世界に強固な地盤をもっていた。大戦末期には、多くのマルクス主義研究者たちが大学のポストを追われたが、1945年後には彼らは大学に復帰して大学内外での知的影響力を強化することができた。多数の経済学部では、ポストのおよそ半分はマルクス（主義）経済学を教える研究者たちによって占められたが、これは先進資本主義諸国の中ではまったく例外的な状況であった。大学教師や学生の多く、また大学外のたくさんの人々が、日本語に翻訳されたマルクスとエンゲルスの著作に関心をよせた。1960年代以降 MEW の全巻が翻訳され広く流布した。また 1975 年の MEGA² の刊行開始後は、『資本論』にかかわる部門 II の主要な諸巻（『グレンドリッセ』、『経済学批判』とその関連諸草稿、『剩余価値学説史』を含む 1861 年から 1863 年の経済学草稿の全体）が、翻訳による制限の中で可能な限り MEGA² の編集レベルを維持したまま日本語に訳出刊行された。これらの翻訳は 1970 年代末から 1990 年代始めにかけて刊行された。他方、相当数の大学図書館と個人が MEGA² オリジナルの継続購入を行なっていたし現在も行なっている。その多くはこれまでに出た MEGA² の全巻を保有している。日本は、各巻の売上が 200 部を超える MEGA² にとっての最大市場国である。これは、日本以外ではどこにも、おそらくドイツやアメリカでも見られない特異な現象である。

しかしながら、1970 年代末以降、とりわけ 1990 年代初頭から、日本におけるマルクス主義の潮流は弱体化している。これは否定しようもないことであるが、しかし、今日もなお研究活動を継続している無視しえない流れが存在する。

このような経過の中で、1990 年代初頭に MEGA² の編集と刊行の継続が危機的状況に陥ったとき、日本では MEGA² に関心をよせる人々の間に強い懸念が喚起された。

b. 日本における編集作業の始まり

部門 II のいくつかの巻の刊行が 1976 年に開始されると、マルクス研究者のうちの一部の人々は、1867 年の『資本論』第一部の刊行に先立って執筆されたマルクスの草稿に強い興味を抱いた。1939 年 - 1941 年版のリプリントとして 1953 年に刊行されたドイツ語オリジナル版と、このドイツ語版を元に 1960 年前後に作成された日本語訳で『グレンドリッセ』を読むことができていた日本のマルクス研究者にとって、これらの草稿は初めて利用可能となったものであった。これらの研究者は『グレンドリッセ』に続く「失われた諸環」の公刊を待ち望んでいた。MEGA²

のこれらの巻は、『資本論』の全体としての理論構造とその個々の構成要素に対する理解を深めることを目的とする、マルクスによる『資本論』の形成過程についての研究の対象となった。このような状況の中で、旧社会主義体制の崩壊とともに危機に瀕した MEGA² プロジェクトの継続について不安を抱く研究者が多くいた。

マルクスの経済思想と理論への前述のような伝統的な強い関心とそれについての研究活動にもかかわらず、日本の研究者達は常に言語的・文化的ハンディに悩まされていた。また、マルクス研究のレベルについての自信にもかかわらず、彼らは自らの研究活動の成果を諸外国に知らせることができなかつた。彼らは外国語で書かれたテクストを繙読・翻訳して西欧起源の科学や思想を吸収することに熱心であったし、そうすることにはかなり長けていた。しかし、若干のまれなケースを別とすれば、自分自身の研究成果を外国語で発表しようとされることさえ、大部分の日本人研究者にとっては問題外であった。しかし、1990 年代初頭の MEGA² 刊行継続をめぐる危機的な状況と IMES の同僚達からの強い要請に促されて、大谷禎之介と大村 泉をはじめとする若干の日本人研究者たちは MEGA² の編集作業に加わることを敢えて引き受けたのであった。そして彼らのイニシアチブで全体として約 30 人のメンバーからなる（いくつかのグループに分かれた）日本の MEGA² の編集委員会が 1990 年代中葉から活動を開始した。この委員会に対して IMES は MEGA² の若干の巻の編集作業を委託した。またこのための契約が両者の間で締結された。主としてドイツ語で書かれたマルクスとエンゲルスの膨大なテクストの編集作業を遂行するためには、ドイツ語を外国語とするメンバーからなる編集委員会にとってドイツ語ネイティブ専門家からの援助が不可欠である。こうして日本メガ編集委員会は、ベルリンとモスクワの若干の編集スタッフとの緊密な協力の下にその仕事を進めている。

編集委員会のメンバーの大部分は、マルクスの思想と理論に関心を持っているが特に MEGA² を主要な関心の対象としているわけではない大学教育・研究スタッフである。彼らは研究活動のための時間とエネルギーの大なり小なりの部分をメガの編集作業に宛てるボランティアとして参加している。フルタイムのスタッフは皆無である。そして、とりわけ旧社会主義体制の崩壊以後の日本の学問世界におけるマルクス経済学の地位の後退により、若い世代からの新しいメンバーを取り入れることが——完遂までに長い時間を必要とする日本での編集作業の存続を保障するための本質的な条件であるにもかかわらず——、きわめて困難になっている。現在の編集委員会メンバーの高齢化は重大な問題であり、早急な世代交代がなされなければならない。

c. 日本で準備された（ている）MEGA² の諸巻

日本の編集チームによる編集作業に委託されたのは、部門 II の第 11・12・13 巻と部門 IV の第 17・18・19 巻である。また、『ドイツ・イデオロギー』を含む部門 I の第 5 巻もドイツと日本の合同チームの手によって現在準備作業が進められている。

ベルリンとモスクワの専門家達からの援助を得て日本で遂行された 10 年以上におよぶ準備作業を経て、部門 II に属する 3 つの巻はすでにベルリンで Akademie Verlag から刊行されている（第 11 巻は 2008 年、第 12 巻は 2005 年、第 13 巻は 2008 年）。これら 3 つの巻はすべて資本

の流通過程を扱う『資本論』の第二部に関係するものである。

第11巻は、マルクスが1860年代末から1880年代初頭までの10年以上の期間にわたって第二部のために書いた8つの草稿のうちの7つの草稿を含む。1863年から1864年にかけて執筆された第一草稿はすでに、1988年に刊行された部門IIの第四巻第一分冊に含まれている。この第11巻は大谷禎之介とモスクワのリュドミーラ・ヴァーシナ女史により準備された。この巻の刊行をもって、『資本論』第二部のためのマルクスの準備草稿の全体がその元の形のままで世界の研究者に利用可能となった。

第12巻と第13巻のための編集作業は、大村 泉を中心とする東北大学の仙台グループによって遂行された。第12巻は、マルクスの残した諸草稿に基づいてエンゲルスが『資本論』第二部の刊行のために準備した草稿に関連し、第13巻は、エンゲルスによって1885年に刊行されたこの第二部そのものを含む。この第13巻はすでに一世紀以上も前に活字にされていたものの事実上の復刊（もちろん新たな付属資料をともなっている）であるが、これに対して、第12巻は、第11巻として公刊されているマルクスの原草稿との比較のための貴重な資料を利用することを初めて可能にするものである。『資本論』第三部とまったく同様に、エンゲルスが編集して1885年に刊行した第二部も、これからは、これら第11巻・第12巻とともに読み込まれ相対化されるようになるであろう。

部門IVの3つの巻のうち、現在までに実質的な編集作業がある程度まで進んでいるのは第18巻のみであり、これ以外の第17巻と第19巻の二つの巻についてはまだ実質的には何も行われていない。これら二つの巻のための作業は第18巻の完了後に遂行されることになるであろう。筆者が直接に関係しているのはこの巻だけなので、部門IVのこの巻の編集作業の性質・内容・困難は後続のeの項で詳しく述べることにする。

MEGA²の部門Iの第5巻については、その編集作業への日本の研究者の参加が始まったのは比較的最近、仙台グループによる上記部門IIの第12巻と第13巻の編集作業が最終局面に入つてからのことであった。『ドイツ・イデオロギー』と呼ばれる1845年にマルクスとエンゲルスが執筆した草稿は、MEGA¹でも同じく部門Iの第5巻として1933年にアドラツキーによって初めて刊行されてから、多くの困難で複雑な編集上の問題を引き起こしてきた。『ドイツ・イデオロギー』の新しいMEGA²版は二人の著者が書いた通りにその諸草稿を再現するであろう。この新しい版は、各行さらには各語まで、その筆者がマルクスかエンゲルスかを読者が一目で知ることができ、二人の著者による数次にわたる執筆と手入れの込み入った過程を読者が視覚的にフォローできるように、編集されることになっている。

d. 部門IIの第12巻でなされた特別なイノベーション、貴重な研究ツール

仙台グループが編集した第12巻は、wissenschaftlicher Apparatと呼ばれる第二分冊中に、これまで刊行されたMEGA²の他のすべての巻にはまったく見られなかつた3つの特別なリストを含んでいるが、それはこの巻の特筆すべき特徴である。3つのリストとは、1.『資本論』第二部の刊行に向けてエンゲルスが作成した原稿のそれぞれの部分を、マルクスの諸草稿の対応箇所

と対比したリスト、2. 出版用の原稿にエンゲルスが取り入れ再現しているマルクスの諸草稿の箇所のリスト、そして、3. テクスト間の乖離のリスト、これはマルクスの原テクストかとエンゲルスの原稿の相違点をすべてひとつひとつ記録するものである。

エンゲルスは、出版のためのテクストを準備するにあたって、マルクスの諸草稿に多数の介入をしている。例えば、彼はテクストの配列や用語法を変更したり、彼自身の言葉を付加したり逆に若干の言葉を削除したりした、等々。それゆえ、エンゲルスの編集作業がマルクスの目指していたことに真に応えるものであったかどうかが問題とされなければならない。

以下は上記の3つのリストの若干の詳細な点の例示であるが、これによってもそのメリットが明確になるであろう。

1. 最初の対比リストにおいて、エンゲルスが導入したテクストの構成が、マルクスが行なった諸章への諸草稿の分割と対比される。このようにして、エンゲルスが各章のタイトルとサブタイトルをどのようにして作成したかが一覧表示される。
2. エンゲルスが採用し再現したマルクスの諸草稿の箇所のリストを使えば、マルクスのテクストのどの部分がエンゲルスの編集したテクストのどの箇所の基礎として使われたかを見ることができる。このリストは、マルクスの原草稿にあった形での議論の構造や順序が、さまざまな仕方でどのように変更されたかを明確に示している。加えて、エンゲルスが若干の箇所を切り縮めていることや、若干の節・章またパラグラフのテクストが複数の草稿から合成された要約からなっていることが明らかになる。
3. 諸テクスト間の乖離のリストは若干の箇所の定式化にエンゲルスがいかに介入したかを具体的に示す。すなわち、どの文章あるいは概念を彼が変えたか、言い換えれば、彼がどのような添削を行なったかを示す。反対に、こうした比較から、どの箇所においてエンゲルスの書いたテクストがマルクスの草稿に正確に従っているかを知ることもできる。このリストによって、これらの変更の全体をすべての個別の点について検証することができる。

e. MEGA² の部門IV第18巻の編集作業

部門IVの諸巻は、マルクスとエンゲルスが読んだ著書・雑誌論文・新聞等々からの抜粋これららの資料に彼らが書き入れた欄外注記をすべて含む。彼らは生涯にわたって抜粋を作る習慣があったので、部門IVに含まれる巻数は他の諸部門の巻数と同程度になっている。第18巻は1864年2月から1868年8月までの間にマルクスとエンゲルスが行なった抜粋を含む予定である。この期間中に、マルクスは抜粋の作成と同時に『資本論』の全三部の最初の下書きと1867年9月に刊行された第一部の最終原稿を書いている。彼は上記の抜粋をこれらのものの執筆と並行して取っていたのである。

編集作業の第一段階は、上記の期間に使用されたノートにマルクスが手書きした抜き書きのオリジナルを解読することである。しかし、よく知られているように、マルクスの筆跡は、極東の島国の日本人にとっては言わずもがな、ドイツ語ネイティブにとってさえも読むのが難しい悪筆である。後者にとってさえ、マルクスの筆跡の解読には長期にわたる特別な訓練が必要であり、

日本編集委員会のメンバーのうち何とかマルクスの悪筆を判読できるものはごく小数しかいない。このような状況では、第一次テクストを作成する目的でマルクスの抜粋のオリジナルを直接解読しつつコンピューターに入力する作業を日本で行うのは不可能である。

しかしさいわいにも、(1930 年前後の約 10 年間の) MEGA¹ の準備期間に、マルクス＝エンゲルス研究所ないしマルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所のスタッフによって、膨大な量のマルクスとエンゲルスのオリジナル手稿が解読されタイプされていた。そして、その大部分はモスクワのマルクス＝レーニン主義研究所（現在では、国立ロシア社会・政治史アーカイブ——ロシア語のイニシアルをとつ RGASPI と略称——として改組・改称）に保管されていた。当時モスクワに滞在していたドイツ語圏からの補助要員による援助を受けて、主としてロシア人スタッフによって作成されたと思われるこれらのタイプ原稿は、MEGA² の新しい編集方針に照らしてみれば完璧とは言えず、あらためてマルクスとエンゲルスの抜粋のオリジナルとの照合を必要とする。だとしても、ドイツ語を外国語とする日本編集委員会のメンバーにとっては、これらのタイプ原稿によりマルクスのオリジナルを解読する作業の困難ははるかに小さくなりうる。これらのタイプされた資料は 2002 年にモスクワから日本委員会に送られてきた。しかし、オリジナル手稿の一部は 1920 年代ないし 1930 年代には解読もタイプもされていなかったので、この部分の解読と入力はベルリンのドイツ語ネイティブの同僚に依頼しなければならなかつた。編集作業の第一段階はこのように、タイプ原稿のコピーをメンバー各人に割り振ってコンピューターに入力することであった。パートタイム・ボランティアとして編集作業に加わっているメンバーにとって、この第一段階だけで約 5 年の期間が必要であったが、ともかく今では第一段階は完了している。

部門IVの諸巻は主として、マルクスとエンゲルスが自ら書いた文章ではなく、彼らが彼らの研究資料（書籍、定期刊行物、新聞、報告書、等々）を読みながらそれらから取った抜粋からなつており、これらの抜粋を元の文章と照合することが不可欠である。この照合が編集作業の第二段階である。最初になすべきことは、抜粋作成の元になった原資料のリストを作成することである。多くの場合、書誌的データ（著者、タイトル、定期刊行物の場合には巻号、出版場所と出版年、ページ）が抜粋テクストとともにマルクスによって示されているが、しかし、こうしたデータが欠けていたり不完全であつたりして、原資料の入手先を特定することが困難であるケースがいくつも存在した。こうして作成されたリスト（不完全なものとならざるをえなかつたが）に基づいて、原資料またはそのコピーを収集しなければならない。また、収集の前提是それらのありかを突き止めることである。すなわち、これらの資料が現在どこに所蔵されているかを確認しなければならない。さいわいなことに、今日では、世界中の大部分の公共図書館や大学図書館のインターネット・オンライン蔵書目録（OPAC）により、短時間で当該資料を容易に検索することができる。必要な原資料の半分以上は日本国内の大学図書館に所蔵されていることが確認された。残りの大部分もいくつかのヨーロッパの図書館（British Library、Bibliothèque Nationale、Deutsche Bibliothek、等々）に所蔵されていた。これらの原資料は当然にも、19 世紀中葉ないしそれ以前に刊行された印刷物からなり、そのほとんどが今日では稀観本に分類される。これらの書籍や

新聞などを保有する図書館は貸し出しを行なわないし、国外から借り出すことは論外である。従つて、新聞や書籍の中の必要な箇所を調べた上でコピーを取らなければならず、多くの図書館が提供している遠隔コピーサービスを利用することができない場合には、国内だけでなく諸外国の図書館にも直接出向いてコピーを取ることが不可欠であった。これは多大な予算と時間を要する作業であり、その遂行には数年かかった。図書館のオンラインカタログで見つけ出すことができなかつた原資料のうちのあるものは、Goldsmith's-Kress Library of Economic Literature のマイクロフィルムや最近の Google Book Search を用いて取得することができた。これらは現在もなお継続的に拡充されているデータベースであり、これまで見つけ出すことができなかつたものでも新たな検索によって見つける可能性が常に存在する。しかし、マルクスとエンゲルスが作成した抜粋のすべての原資料を見つけ出すために継続的な努力を払つたにもかかわらず、小数の資料（10%未満）はいまだに所在を確定できていない。探索は続けても、しかし、残りの数が少なくなればなるほど見つけ出せる望みも薄くなつてくるであろう。

抜粋の原資料との照合は、マルクスがどのように抜粋を作成したのかについて読者に提供する情報を整備するための前提である。マルクスの抜粋と原資料の対応箇所との間の不一致はすべて編集者注の中で指摘される。従つて読者は抜粋と原資料とを並行して読むことができる。マルクスの抜粋は原テクストの忠実な写しとは必ずしも限らず、あるときにはいくつかの言葉を飛ばしたり彼自身の言葉で置き換えたり、あるいはパラグラフ全体を要約したり、さらによつた、いくつかのパラグラフから若干の箇所を切り取つてそれらをひとつのパラグラフに貼り合わせている等々、といった具合である。また、原文がドイツ語以外のテクストからの抜粋の場合には、マルクスは一文全体または一文内のいくつかの言葉をドイツ語に訳していることもある。ここかしこに彼自身の短いコメントをドイツ語だけでなく他の言語でも挟んだり、単なる間投詞を入れたりすることもある。マルクスによるこれらの挿入句はフォントを区別して明示しなければならない。このような流儀で作られた抜粋を原資料と照合することは容易で簡単な仕事ではない。性質の異なるいくつかの部分からなるテクストをひとつのページの上に同時に表示するために、それぞれに対応する文字は異なつた色で入力される。原資料のコピーをすでに入手することができた抜粋部分については、照合はすでに済んでいる。そして、この作業の結果は、編集作業の最後の段階でApparateilの編集者注を書くときに利用されることになるであろう。

次の第三段階の内容は、1930年前後のおよそ10年間にモスクワで作成されたタイプ原稿に基づいて入力された抜粋テクストをマルクスの抜粋のオリジナルと突き合わせてチェックすることである。MEGA²の部門IVの第18巻に含まれる予定のタイプ原稿がモスクワから日本編集委員会に送られてきたのとほぼ同時期に、マルクスのオリジナル草稿のコピーのうちの対応する箇所の複写も日本に送られてきた。しかし、このコピーは第二次世界大戦より何年も前に作成されたものであり、その上さらにもう一度複写されたものであったので、入力したテクストをチェックするためのオリジナルとして使用するには鮮明さが不十分であった。

MEGA²の編集作業とマルクスの経済思想・理論についての関連研究とのために2007年度から3年間の科学研究費補助金が交付されたおかげで、日本の編集グループのうちの4人のメン

バーが、MEGA²の部門IVの第17・18・19巻に含まれる予定のマルクスとエンゲルスの原草稿の高解像度のデジタル画像を取る目的で、アムステルダムのIISGに行くことができた。日本に帰国後、これらの画像はPDFファイルに変換されたが、これにより画像はさらに一層鮮明なものになった。コンピューター上でのデジタルファイルの形にした画像は画像にさまざまな操作を加えることを可能にする。例えば、光度を調整したり、画像のコントラストを上げ下げしたり、あるいは、色調を変化させたり等々、することによって、紙の上に書かれた原草稿ではけっして見ることのできないもの、例えば、透かし、消した文字、隠れた筆遣いを検出することができるようになる。

編集作業の第三段階は、マルクスが読んだ原資料と照合を経た入力テキストを、デジタル画像に変換されたマルクスの抜粋の原草稿と突き合わせチェックをして、数年後に刊行予定となるMEGA²の巻のための基本テキストを作成することである。2008年に刊行された部門IIの第11巻についての編集作業の開始以来マルクスの草稿の解説に携わってきた大谷禎之介の援助を得て、また、MEGA²のドイツの専門家であるロルフ・ヘッカーからの支援により、編集委員会のメンバーはこれまでに入力したテキストをチェックするためのマルクスの原草稿の解説に着手し、この作業をほぼ完了させている。非ドイツ語ネイティブのグループにとって編集作業全体の中でもっとも難しい局面であるこの第三段階は、2009年度中あるいは遅くとも2010年度中にはすべて完了する見込みである。

最後の第四段階はApparateilのすべての部分を執筆することであるが、そのうちもっとも重要なものが序文である。序文の主な内容は、説明根拠を示した上でそれぞれの抜粋部分の書かれた日付を確定すること、そして、これらの抜粋が作成された当時のマルクスの研究活動の背景を説明することである。MEGA²の巻に含まれるテキストは必ず厳密に年代順に配列されるのであるから、各部分の成立日付の確定とその妥当性の説明が序文のもっとも重要な主題となる。この序文以外に、編集者注、人名索引、事項索引、文献目録をドイツ語で作成することになる。これらすべての作業が完了した後に、全編集作業の結果はドイツ語ネイティブの監閲者(Gutachter)に引き渡され、準備されたテキストが印刷過程に移されるかどうかが監閲者の意見によって決定される。

参考文献

- IMES, *Editionsrichtlinien der Marx-Engels-Gesamtausgabe (MEGA)*, Dietz Verlag, Berlin, 1993 (邦訳『マルクス・エンゲルス全集(MEGA)の編集要項』、市原健志・大野節夫・大村泉・柴田信也・宮川彰・八柳良次郎訳、マルクス・エンゲルス研究者の会編『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第32号、1998年)
- Izumi Omura, Engels' Abweichungen von Marx' Texten im Redaktionsmanuskript zum zweiten Buch des Kapital und ihre Darbietung, *MEGA-Studien*, 2002
- Jacques Grandjondc, Jürgen Rojahn, Der redivierte Plan der Marx-Engels-Gesamtausgabe, *MEGA-Studien*, 1995
- Jürgen Rojahn, Und bewegt sich doch! Die Fortsetzung der Arbeit an der MEGA unter der Schirm der

- IMES, *MEGA-Studien*, 1994 (邦訳「それでもメガは動いている！-- IMES の傘下でのメガの作業の継続--」渋谷 正訳、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第23/24巻、1995年)
- Kenji Mori, Zu den Merkmalen der Umschlagstabellen von Marx und deren Behandlung im Redaktionsmanuskript von Engels, *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung*, Neue Folge 2004
- Kurt Müller, *Die systematische Entzifferung von schwerlesbaren Handschriften unter besonderer Berücksichtigung der Handschriften von Karl Marx und Friedrich Engels*, Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der SED, Marx-Engels Abteilung, Berlin, 1967 (邦訳「マルクス／エンゲルス手稿の体系的解説」小黒 正夫訳、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第30巻、1997年)
- Regina Roth, Karl Marx's original manuscripts in the Marx-Engels-Gesamtausgabe (MEGA): another view on Capital, in *Re-reading Marx, New perspectives after the Critical Edition*, edited by Riccardo Bellofiore and Roberto Fineschi, Palgrave, 2009
- Rolf Hecker, „Das Kapital“ und Vorarbeiten in der ersten MEGA ---zur Archiv- und Editionsgeschichte Marxscher Manuskripte, 1995, mimeo (邦訳「旧MEGAにおける『資本論』および準備労作」--マルクス草稿のアルヒーフ史および編集史によせて--」大村 泉訳、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第23/24巻、1995年)
- , New perspectives opened by the publication of Marx's manuscripts of Capital, Vol. II, in Riccardo Bellofiore and Roberto Fineschi, Palgrave, 2009
- , Der Beitrag der japanischen Wissenschaftler zur MEGA, presentation to the Symposium "Results of the edition of MEGA² and Tasks of the digitalised edition", Rikkyo University, Tokyo, March, 2009
- Teinosuke Otani, Zur Datierung von Marx' Arbeit am zweiten Buch des Kapitals, insbesondere an Manuskript VIII, *MEGA-Studien*, 2001
- Tomonaga Tairako, Die Grundfehler der Hiromatsu-Edition der Deutschen Ideologie, *Hitotsubashi journal of social studies*, Vol.40, No.1, July, 2008

<http://www.iisg.nl/imes/>

<http://www.bbaw.de/bbaw/Forschung/Forschungsprojekte/mega/de/Startseite/>

(本稿は2009年4月末ギリシャのテッサロニキのマケドニア大学で開催されたヨーロッパ経済学史学会第13回年次大会の英語報告論文の一部の邦訳である。ただし、特に外国人読者を想定して書かれた若干の部分には邦訳にあたって手直しを施した。2010年2月記。)